

文語の苑第七回シンポジウム

愛甲次郎
あいかふじらう

第七回文語の苑シンポジウムは、「文語の世界に現れたる妖怪」をテーマとして平成二十九年十一月十二日（日）午後一時より東洋大學白山キャンパスにて開催せられたる處、約七十名の参加者を得て成功裡に之を了せり。その概要下記の通り。

東洋大學理事長福川伸次氏の開會挨拶に續く、同大學竹村牧男學長の「井上圓了と妖怪の世界」と題する講演を以て幕を開きぬ。東洋大學の創始者たる井上圓了は明治の開國に際して哲學を我國に導入せる先驅者なれど、同時に迷信の打破、啓蒙のため所謂妖怪に關する膨大なる研究を成し遂げたる事績は夙に知られたり。講演はその詳細なる紹介にして極めてアカデミックなる内容なりき。次の講演は、元明治大學教授、芥川賞受賞作家なる三浦清宏氏の「生靈について」なり。同氏は心靈學界の第一人者とし

て知らる。講演の内容は、源氏物語の六條の御息所の故事を引きつつ講師自身の不可思議なる體驗を語るものにして、小説を聴く感ありとは一聽衆の感想なり。最後は文語の苑主任研究員の高田友氏の「時代を駆け抜けたる妖怪たち」と題するものにして、冒頭朗讀家の熊澤南水師（文化廳藝術祭賞大衆藝能部門優秀賞の受賞者）による雨月物語の一節の朗讀あり。本論に入りて妖怪に關する中國の影響の一例として玉藻の前（九尾の狐）の紹介あり。次いで妖怪となすには些か難あれど、三種の神器に纏はる數多の故事を紹介して講演を締めくくれり。

文語を學ぶには言葉のみならず、歴史、宗教その他往時の人々の心的状態をも深く理解する要あり。妖怪はその意味に於て重要な項目なり。